# 特集 1 Internet Week 2012／IP Meeting 2012 ～人のチカラ、インターネットのチカラ～ 開催報告

2012年11月19日（月）～11月22日（木）の4日間、富士ソフトアキバプラザにて、Internet Week 2012を開催しました。この秋葉原の会場はもう3度目となり、皆様にとっても、会場自体はおなじみとなったかもしれません。しかし今回は、前の2年とは別の階を利用したことで、総合受付が真ん中に配置され、この受付を起点として各セッション会場は放射線状に広がる形式でした。「印象が違う!」という声が多く聞かれましたが、皆様はどのようにお感じになったでしょうか?期間中、延べ2,200名もの方にご来場いただきました。

## ◆ 今年のプログラムと会場の様子

### （1）プログラム全般について

IPv4/IPv6･DNS･ルーティング･セキュリティ等々、インターネット基盤に欠かせない技術を基本とし、今年の旬の話題も取り入れ、バラエティ豊かなプログラムを提供しました。有料セッション22（うちチュートリアル11、最新動向セッション8、ハンズオンセッション3）、無料セッション8（うちランチセミナー2、BoF5）、懇親会で、計31セッションとなり、1日平均で7セッションが開催されていたことになります。プログラム一覧については、次のURLをご覧ください。

https://internetweek.jp/program/

### （2）チュートリアルを増やした有料プログラム

今年は、「クラウドの運用」「OpenFlow」「標的型攻撃の現状と対策」「スマートフォンのリスク管理」「事業者に関連する法的問題とサイバー犯罪の実態」「ソーシャルメディアの落とし穴」など、今注目の最新動向も取り入れ、すぐに業務に生かせる「チュートリアルセッション」を増やしました。アンケートからも「学びのセッションを増やして欲しい」という声は、前から根強くありましたし、「エンジニアも知らなきゃならない財務会計」「インターネットの決めごとの作り方を学ぼう」などという、いわゆる技術に特化しているわけでないが、技術者が困っていそうだからサポートできるようなプログラムにも取り組んでみたいという気持ちは、運営サイドとしてもありました。こうしたチュートリアルの増量は結果的におおむね好評で、エンジニアの皆様が「取引先の健全性をはかる財務分析」などに耳を傾けている様子はとても印象的でした。

また、ハンズオンもIPv6のセッションだけではなく、OpenFlowについても行われました。このOpenFlowのセッションの参加には、参加者自身が仮想サーバ（VMWare）のイメージを自身でインストールして持参しなければいけないというハードルがあり、運営側でもそれを用意して来られない人のために何名分かの用意をしていたものの、それを超えたらどうしようと心配していました。しかし、ほぼ全員が当日きちんと準備をしてきて、講師も驚いていました。また、参加者のレベルもとても高かったとも聞いています。

● OpenFlowのセッションには、各自がPCと環境を準備して臨みました

### （3）クオリティの高かった無料プログラム

BoFも、ランチセッションも例年以上に盛り上がっていました。特に今年のランチセッションは、株式会社日本レジストリサービスとNTTコミュニケーションズ株式会社の提供でしたが、「両方ともクオリティが高い」という声が、あちこちで聞かれました。嬉しい気持ちでいっぱいながら、有料セッションもますます気を抜けないな、と思いました。

また、昨年行って好評だった無料セッション「インターネット資源管理の基礎知識（ドメイン名/DNS/IPアドレス）」も今年のオープニングプログラムとし、ドメイン名、IPアドレス、DNSなどのインターネット資源管理の基礎について学ぶ時間を設け、Internet Week本体への導入としました。同時に「第23回JPNICオープンポリシーミーティング（P.20）」「第35回ICANN報告会（P.17）」も併設イベントとして開催しました。

### （4）資料の配布と会場の様子

2年前から、講演資料の配布については、Webサイトから参加者自身にPDFをダウンロードしてもらう方法をとっています。昨今、PCの持ち出しは会社によってはとても厳しいこともあり、「今年は、自前のタブレットを持ってくる人が多いのでは」と予測し、当日その場で資料ダウンロードページのURLを打ち込むのは面倒だろうと、配布のレジュメにはカメラで撮影できるようQRコードを載せていたのですが、タブレットについてもスマートフォンについても、資料閲覧用としての利用率は見たところそう高そうではなく、普通にPCを持ち込んでいる人が多く見受けられました。さすがは「Internet Week」です。PCとスマートフォンを同時に会場の無線LANにつなげる人も数多くいたようで、会場によってはDHCPで割り当てるIPアドレスの数が足りなくなり、ネットワークチームが急遽アクセスポイントを追加したりしていました。

## ◆ 今年の運営における舞台裏

運営の「舞台裏」というものは、参加者の皆様は知る必要もないことかと思いますが、しかし、今年のドラマとして個人的にも感慨深かったことをここに三つほど記しておきたいと思います。

### （1）デジタルサイネージの設置

株式会社SRAのご好意により、会場の総合案内として「デジタルサイネージ」を設置することができました。総合受付の横に大きく置かれていたので、きっと皆様の目に留まったことでしょう。

サイネージの画面をタッチすると、4日分のスケジュールはもちろんのこと、会場マップ、各セッションの詳細、講演資料閲覧用のQRコード、RSS、Facebook、Twitterなど、ありとあらゆる情報を見ることができます。また、セッション開始前には「まもなくセッションが始まります」というアラートも出てきます。

このサイネージは同社が今後販売していきたいと考えているもので、ゆくゆくはこのサイネージと同じ内容をスマートフォンでも閲覧できたり、オンラインショッピングが楽しめたり、いろいろな用途に使えるようにしていきたいとのことです。今回、試作だからと贅沢にもこの4日間のInternet Weekのためだけに特別にカスタマイズしていただきました。デジタルサイネージであれば、利用者がどういう情報を欲してどこを閲覧しているかなどもアクセスログからわかり、それを元にその後に情報の見せ方を工夫させることもできます。会場で何人もからこのサイネージについて聞かれました。ある意味、このサイネージも「Internet Week 2012の主役の一つであった」と言えるかもしれません。

このサイネージの作成のために、株式会社SRAの皆様とは、何度も打ち合わせを重ねて作成していただきました。ここにお礼を申し上げます。

### （2）学生ボランティアがネットワークチームのお手伝い

昨年から引き続いて2回目の企画なのですが、ICT教育推進協議会と連携することで、Internet Weekのネットワークチームとして、5名もの学生の皆様に活躍いただきました。今井慶人さん、川本隆史さん、權裕文さん、砂辺樹慶人さん、服部和大さんです。

昨年は2名の学生さんでしたが、今年は5名になったことで、並行処理できる仕事も増え、事前のネットワーク設計、サーバ構築、ネットワーク敷設から当日のサポート、後片付けまでをそれぞれの持ち味も生かし、分散化しながら安定して作業をしていたように見受けられました。特に服部和大さんは昨年に引き続き2年目参加で、リーダー格としても活躍していたように思います。

会場のアドレスが足りなくなったり、ハンズオンセッションが並行して走ったりして、バタバタしがちだった現場も、1日のToDoを時間ごとにホワイトボードに書いて整理し、時間になると的確に処理し、空いている時間はセッションに出たり、出店されていたO'Reilly社の本を買って楽しそうに眺めていたり、ネットワークの監視プログラムを自分で作っていたりする様子を見るにつけ、「なんて頼もしいのだろう」とほほえましく思いました。

Internet Weekの会場にいると、どこかのプログラムで必ず一度は「ネットワーク業界の高齢化を何とかせねば!」などと、若干暗めの話がされているのを聞いたりするものですが、こういう風景を見ると、「いろいろ言っていないで、元気に働かなくちゃいけないのは私達の方だな」と思わされました。

● 懇親会会場で紹介された学生ボランティアの皆さん

### （3）広くなった?事務局スペースとIP Meetingのサテライト会場

例年は事務局として小さな部屋を一部屋、講師の方々の控え室･打ち合わせスペースとして小さな部屋を何部屋か利用しています。しかし、今年は導線の兼ね合いなどから大部屋を一つ借り、それをホワイトボードや机で仕切って何島か作ることで、事務局スペースと講師の控えスペースが同じ空間に同居することになりました。

Internet Weekの一つの特徴として「講師の方の数が多い」ということがあげられます。例年100～150名の方がおり、同じセッションの講師陣が講演のために事前に打ち合わせなどをすることも珍しくありません。

今年はそうした「大部屋」しかないため、いくつかのセッショ

ンの打ち合わせが並行して走った場合やお昼の時間などにうるさすぎるのではないか、スペースが足りないのではないか、などという心配をしていました。

しかし、結果的にこうした心配は杞憂に終わりました。このスペースに多くの人が集まることで、そこがいろいろな人との出会いの場にもなり、とてもよかった、という声を数多く聞きました。

また、この事務局大部屋は、最終日には、人が溢れたIP Meetingのサテライト会場にもなり、多くの関係者やプログラム委員がこの部屋からIP Meetingを堪能していました。富士ソフトアキバプラザから多くの技術支援もあったため、この部屋で大スクリーンを見ながら、会場と同じ雰囲気を事務局にいながら堪能することができました。

### ◆「人のチカラ、インターネットのチカラ」を考える、そして2013年のInternet Week開催に向けて

今年のInternet Weekのテーマは、「人のチカラ、インターネットのチカラ」でした。これは統括の前村が表現した通りの願いをこめて作成したものです。

「人々の努力によって日々成長し、たくましくなっていくインターネット。そして、それを支え続ける人、インターネットを使ってこれからの世界を作っていく頼もしい人。そういう、人のチカラとインターネットのチカラを感じ、元気になるようなInternet Weekをめざすため、Internet Week 2012のテーマを、「人のチカラ、インターネットのチカラ」としました。

こういうことを言うと身も蓋もないのですが、こうしたテーマはあってもなくても、特にイベントの盛り上がりに影響はないのかもしれません。しかし、私達はここ数年、このテーマを何にするかに少なくない議論を重ねています。というのも、今年はどういう世相だったのか、その中で私達はこのイベントで何を大切にしたいかを、届けることが重要ではないかと考えているからです。

今年のテーマは、インターネットの本質を表すような内容になり、行き着くところにきたな、と感じました。Internet Weekのプログラム委員は皆ボランティアですし、このイベントに関わった誰一人が欠けても、Internet Weekは成立せず、本当に参加者全員によって作り上げられているイベントだ、そう感じています。足をお運びいただいた皆様をはじめとして、講演者の皆様、協賛企業の皆様、プログラム委員の皆様、関係者の皆様に、この場を借りてお礼を申し上げます。

皆の口から、来年はどのようなワードが出てくるのでしょうか。苦しみでもありますが、なんだかんだ言って、一番それが生まれるのを楽しみにしているのは、運営をしている私達なのかもしれません。日程および場所ともに確定していませんが、2013年のInternet Weekも11月最終週に秋葉原で開催したいと考えています。決まり次第、ご案内いたします。

Internet Week 2012の講演資料、参加者アンケートの結果、BoF開催報告、写真につきましては、2013年春に以下のURLにて公開しておりますので、こちらもぜひご覧ください。

http://www.nic.ad.jp/ja/materials/iw/

### ◆ Internet Week 2012 概要

【会期】2012年11月19日（月）～22日（木）4日間

【会場】富士ソフト アキバプラザ（東京・秋葉原）
東京都千代田区神田練塀町3 富士ソフト秋葉原ビル
http://www.fsi.co.jp/akibaplaza/cont/info/access.html

【URL】https://internetweek.jp/
Twitter https://twitter.com/InternetWeek_jp
Facebook https://www.facebook.com/InternetWeek

【主催】社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター（JPNIC）

【企画】Internet Week 2012プログラム委員会

【協賛】NTTコミュニケーションズ株式会社
株式会社日本レジストリサービス
株式会社SRA
グリー株式会社
さくらインターネット株式会社
日本インターネットエクスチェンジ株式会社

【ネットワークスポンサー】
シスコシステムズ合同会社
富士ソフト株式会社

【後援】総務省／文部科学省／経済産業省
ICT教育推進協議会（ICTEPC）
IPv6普及・高度化推進協議会（v6pc）
財団法人インターネット協会（IAjapan）
仮想化インフラストラクチャ・オペレーターズグループ（VIOPS）
一般社団法人クラウド利用促進機構（CUPA）
一般社団法人 コンピュータソフトウェア協会（CSAJ）
一般社団法人 JPCERTコーディネーションセンター（JPCERT/CC）
一般社団法人情報サービス産業協会（JISA）
独立行政法人情報通信研究機構（NICT）
一般社団法人電子情報技術産業協会（JEITA）
社団法人日本インターネットプロバイダー協会（JAIPA）
日本シーサート協議会（NCA）
日本DNSオペレーターズグループ（DNSOPS.JP）
一般財団法人日本データ通信協会（Telecom-ISAC Japan）
日本ネットワーク・オペレーターズ・グループ（JANOG）
特定非営利活動法人日本ネットワークセキュリティ協会（JNSA）
日本UNIXユーザ会（jus）
フィッシング対策協議会
WIDEプロジェクト（WIDE）

（JPNIC インターネット推進部 根津智子）

## ■ IP Meeting 2012 開催報告

2012年11月22日（木）、Internet Week 2012の最終日にIP Meetingが開催されました。参加者数は約200名で、参加者の内訳はネットワーク事業者、ISP事業者、大学関係者など、インターネットに関わる方々でした。一日中、会場が定員一杯であったため、同じアキバプラザ内に、会場を映像で中継したサテライト会場が設けられました。

ここ数年のIP Meetingは、Internet Weekのプレナリー（全体会議）の位置づけで行われています。今回のIP Meetingは、三部の構成でした。はじめは、2012年に最も注目されていたIPv6とIPv4の共存の動向の話題を取り上げました。次に2012年のインターネットの運用の動向を振り返りました。最後は、現代のインターネットの世相を受けて設けられたテーマについてのディスカッションです。ここでは、このミーティング全体を報告します。

### ◆ Internet Today! 午前の部 ― IPv6とIPv4の動向と対策

2011年4月にAPNICとJPNICのIPv4アドレスが枯渇してから1年以上が経ち、ISPにおけるIPv4アドレスの枯渇が身近な話題となってきました。午前の部では、「IPv6とIPv4の動向と対策」について、三つの話題を取り上げました。

**（1）IPv4アドレスの売買**

2011年に米国での大規模なIPv4アドレスの移転がニュースになりました。現在は国内でも移転の制度を使った移転が行われており、売り手や費用の取り扱いがどのようになるのかが注目されています。RIRの地域を越えた移転の現状や制度について、Geekなページで知られるあきみち氏に解説していただきました。

**（2）World IPv6 Launch**

2011年に行われたWorld IPv6 Dayの1日のイベントから発展し、IPv6を本格導入するとして2012年6月6日から始められたWorld IPv6 Launch。この後も、IPv6の利用状況の計測活動が継続されています。World IPv6 Launchとその後の動向を、ISOC-JPチェアである江崎浩氏に解説していただきました。

**（3）IPv6/IPv4共存技術**

IPv6とIPv4の共存技術の多くのプロトコルが提案され実装されています。これをソフトバンクテレコム株式会社の松嶋聡氏は、「統一的でユニバーサルなプロトコルを作ろう、というアイディアが新たなプロトコルを生み出し、その結果、数を増やすだけに終わる」というマンガになぞらえた上で、IETF Softwire WGの様子をわかりやすく解説していただきました。

最後に、パネルディスカッションが行われました。「枯渇後、IPv6とIPv4は共存できる環境が整っているのか」というテーマで、整い度合いを示すKAME※のアイコンを使ってパネリストの視点を伺ったところ、SIの事業者や企業ネットワークではサービスとして準備が整ってきているにも関わらず、一般家庭におけるゲームなどの利用を前提とすると、まだまだ整っていない状況が伺われました。

※ BSD系のOSで国際的に初めてIPv4とIPv6のデュアルスタックの実装を行ったKAMEプロジェクトのマスコットキャラクター

### ◆ Internet Today! 午後の部 ― インターネット運用の動向／ホットトピック

午後の部はインターネットやシステム運用の観点で、2012年の出来事を講師の方々に振り返っていただきました。

**インターネット運用状況**

インターネットマルチフィード株式会社の吉田友哉氏による恒例の講演です。尖閣諸島のニュースやアイドルグループのイベント、ソフトウェアリリースなどが、ISPにおけるトラフィックに如実に現れると共に、World IPv6 Launchとその後のIPv6の普及度合いがインターネットの経路表に現れていました。インターネットが現代社会の出来事とつながり、そして同時にネットワークの運用が利用者の動静に影響している様子が伺われる解説でした。

**人為的ミスにおける大規模障害**

2012年にはクラウド技術を利用したサービス提供が一般的になりつつあり、そのサービスにおける大規模障害も話題になりました。この大規模障害は、熟練した技術者による運用であっても障害が起こりうるという、インターネットやシステムの運用においても他人ごとは考えられないことが特徴的でした。S&Jコンサルティング株式会社の三輪信雄氏に、大規模障害の調査を通じて見えてきた、運用の考え方について、示唆に富む考察をしていただきました。

**セキュリティ・インシデントの解説とイベント紹介**

株式会社ラックの川口洋氏には、2012年に話題になったさまざまなセキュリティ・インシデントについて解説していただきました。スマートフォンにおけるマルウェアや、Anonymousの活動、Flameや認証局における不正証明書発行事件など、2012年は多くのインシデントがありました。最後に、産学共同で開催された「サービスを守る」観点のイベント「Hardening One」についても紹介されました。

午後の部の最後には、LTE（Long Term Evolution）を使った大規模な携帯電話網にIPv6導入した、Verizon社の技術者のビデオ上映が行われました。IPv6導入のモチベーションとその社内での説明、端末とIPv6の位置づけの整理といった導入時の課題など、国内でも直面する課題を克服してきた様子が伺われました。

● 共存環境が整っているかという質問にも答えるパネリスト

## ◆ テーマセッション:人のチカラ、インターネットのチカラ

2012年は、東日本大震災から1年以上が経過し、既に普及したスマートフォンやソーシャルメディアに加えて、クラウド技術が普及してきました。2012年を振り返ると、この1年は、私たちの生活を一変させるような、新しい技術やサービスが現れた年というよりは、これまでの技術が徐々に普及し、新たな課題が見えてきた中で、一歩を踏み出すような1年だったのではないでしょうか。テーマセッションを設けるに当たっては、そのような仮定を置きました。

デバイスからインターネットのサービスに至るまで、国際的な競争にさらされている中、私たち自身の強みや日本のインターネットが持つ特徴、そして良さにはいったい何かあるのか、来場者の皆様と一緒に、考えるきっかけになることをめざして設けられたテーマが、Internet Week2012そのもののテーマである「人のチカラ、インターネットのチカラ」です。テーマセッションは、次の三つのパートで構成され、ディスカッションされました。

### 1. 他のインフラ業界から見たインターネット

一つ目のパートでは、電話や鉄道、通信施策の分野からインターネットを見たときの特徴やインターネット業界ではない“外”からの視点を、専門的な関わりをお持ちの方々に伺いました。加入者数のような“数”を軸に捉えた、ビジネスの根本的な考え方の違いや、国際標準に則っている技術を使いながらも、国内のインターネットは海外にも展開できるような、独自の優れた運用が行われているという現状が見えてきました。

（講演者）
- 水越一郎氏（東日本電信電話株式会社）
- 櫻井浩氏（JR東日本メカトロニクス株式会社）
- 実積寿也氏（九州大学）
- クロサカタツヤ（株式会社企）

### 2. 外からみたJP

二つ目のパートでは、国際的な視点で、日本のコミュニティやインターネットの特徴を伺いました。インターネット経路制御においても「真面目な日本人」の運用が行われており、素晴らしい文化の表れであるという指摘と共に、施策を考える場面で、オープンな議論が足りていないこと、そして言葉だけでなく「実現力」をつけることが課題として指摘されました。

（講演者）
- 川村聖一氏（NECビッグローブ株式会社/JANOG）
- Randy Bush氏（株式会社インターネットイニシアティブ）
- 石田慶樹氏（日本DNSオペレーターズグループ代表幹事/日本インターネットエクスチェンジ）

### 3. パネルディスカッション

最後は、これまでのディスカッションを受けたパネルディスカッションです。他のインフラ、特に鉄道業界との違いに議論が集まりつつ、各パネリストから興味深いお話を伺うことができました。

以降では、各パネリストのお話のサマリーを紹介します。

## インターネットはユニバーサルサービスか　水越 一郎

水越氏からは、電話とインターネットを比較しながら、今後のインターネットサービスのあり方についての問いが投げかけられた。

ユーザー数ベースでみると「電話屋からみるとインターネットはユーザー数が延びていてうらやましい。」と話しながら、電話とインターネットの比較を「ユーザー数の推移」、「トラフィック」、「課金モデル」等から紹介。また、固定と移動体という切り口でも比較。

そして、NYタイムズに掲載されたVint Cerf氏の記事を引用し「インターネットアクセスは人権ではなく、ユニバーサルサービスと考えるべき」という捉え方もあることを紹介した。

電話におけるユニバーサルサービスの原則である「不可欠性」、「低廉化性」、「利用可能性」に対し、インターネットは品質基準がまだ明確ではなく、こういったことをもっとこれから考えていかなければいけないかもしれない、と水越氏は語る。

最後にオープンクエスチョンとして、「インターネットはユニバーサルアクセスとなれるのか、なる気があるのか。」という問いで締めくくられた。

## 鉄道業界から見た通信　櫻井 浩

鉄道と通信業界の両方を経験されている立場から、二つの業界の違いと共通点を紹介。

共通点は、どちらも「人」と「パケット」という違いはあれど、「流動させるためのネットワークを構築している」こと、どちらも「社会インフラである」こと。また、「昔は単線レールで信号がなく、隣の駅に列車の衝突事故を防ぐために発着の連絡が必要であり、独自の通信電線を引いていた」という、鉄道を運行するために通信と深い関わりのある歴史も披露した。

一方、大きな違いとして、「事業ポリシー」を挙げた。インターネットはパケットがぶつかりあっても再送すれば良いが、鉄道では人命に関わるため、何よりも安全が重視される。何かあれば停めることが鉄則。連結が外れた場合は一斉にブレーキをかけることが国土交通省の法令でも定められている。

現在、日本の鉄道ではあまり実績がないが、最近は鉄道用機器の輸出入が行われるようになったとのこと。ヨーロッパは、国際標準作りにとても強い。この点は150年の国際標準化の歴史を持つ通信業界を先輩として見習いたいとして締めくくられた。

## インターネットにはソムリエが必要　実積 寿也

実積氏からは、インターネットの特性と課題、そして今後どういう対応がユーザーにとって嬉しいのかという視点が紹介された。

まずはインターネットと家電とを比較した上で「インターネットは永遠のβ版」との見解を示した。「ベストエフォート」というマジックワードのもと、品質保証の概念がインターネットにはない特徴を説明し、また、対価に見合うサービス提供の視点で、日本のブロードバンドではサービス帯域が実際に実現できているケースは20-40%程度という数値が紹介された。

これは見方を変えると今利用している商品が完璧ではない、ということを認めていることではないかと述べ、それではユニバーサルサービスにはなりえないとしながらも最後にインターネットの特徴を三つあげたうえで、「これはワインと同じ」との仮説を提示。

そのうえで、インターネットが信頼のおけるインフラとなるためにはユーザーのニーズにあったサービスを提供できる専門家のアドバイス、すなわちソムリエが必要ではないかという視点が提示された。

## ケータイとインターネット「共存から協調へ」　クロサカ タツヤ

クロサカ氏の発表では、携帯電話を取り巻く状況を紹介しながら、インターネットとの今後の関係のあり方について提起された。

携帯電話のIP化、IPv6対応、現在の直面している課題が紹介された。NTTドコモの大規模障害を例にあげ、課題としてトラフィックの一極集中をあげている。通勤電車時の携帯利用を例にあげ、これだけの量のトラフィックを処理することは「インフラにとっては地獄絵図」と形容する。

さらに、ユーザーが携帯とインターネットをほとんど区別しない傾向がスマホ時代に強まっていること、ISPと携帯業界は、今やIPという共通技術をベースとしており、同じような課題を抱え始めている状況で「共存から協調へ」のあり方を考えていくべきではないかとの問題提起が行われた。

もちろんこれは簡単な話ではなく、そのためには相互理解を促進するメカニズムとモチベーションの設計が重要。それを踏まえて「携帯とインターネットが合コンするべきではないか。」として締めくくられた。

## スキルの伝達が日本に期待されていることではないか　石田 慶樹

石田氏からはIXP間の技術的、運用的な情報交換の場であるAPIXの活動から見えてきたことが紹介された。

日本はインターネットもモバイルも成熟市場であり、世界有数のブロードバンド大国。一方、コストの高止まり要因も多く、今後の成長市場は上位レイヤーまたは海外になるだろうと、その事例をIPアドレスやドメイン名の日本への分配比率を例として提示した。

そして香港、台湾、韓国はまだまだ成長している状況を語る。「人、物、金がどんどん入ってきて、インフラレイヤーにおいても若い人材が集まり、元気」と語る。また、一部の地域においてはインターネットをとばして、モバイルが爆発的に成長ということも考えられるとの考えを示し、「アジア太平洋地域は、日本にとって拡大のために出て行くべきところ。一方、ライバルも多く、グローバルな競争にもさらされている」と述べた。

そして「APIXでも、日本への期待は、資源や教育への期待であって、技術力や先行者へのリスペクトを感じる。リダンデンシー対応をしていること等、スキルの伝達が日本に期待されていることではないかと感じる」と締めくくった。

## 目標を見失わない強さをみんなで身に着けよう　川村 聖一

川村氏からは日本と国外の運用経験を通じて気づいたこと、日本のコミュニティのあり方に関する考えが発表された。

異なるパラダイムに触れることでポジティブな影響を受け、インターネットが世界とつながっていることを実感した経験を「世界と話してみると日本の常識は、経済状況や趣味趣向に大きく影響されていることがよくわかった。品質に対する要求も違う。求める勘所が国によって違う」と語る。

具体例として、名刺交換をきっかけに知った「何が重視されるのか」の違いが印象的であり、その経験を交流に活かしていることが紹介された。一方、海外に行き、日本のことを聞かれた際に、答えに困ることも多くあったことも語られた。

そのような経験を通じ、海外への質問に対する答えを自分なりに作り出すためにいくつかの取り組みを行い、さらに胸をはって世界で通用する常識感覚で貢献するためには「政治、エンジニアリング、経済、学術について、オープンにフラットに意見できるコミュニティが日本にも欲しい」と考え、ISOC-Japan Chapterに関わって活動をしている。

その上で最後に「目標を見失わない強さをみんなで身に着けよう」との呼びかけで発表が締めくくられた。

## すべてのレイヤーの関係者とのオープンな対話をどう実現していくのか　Randy Bush

Randy Bush氏からは日本のインターネットの技術コミュニティの良さと、彼が懸念に感じていることが紹介された。

日本のインターネット技術コミュニティにおける協調性の素晴らしさを強調。「インターネットとは“協力”と“協調”を体現するものです。競合者同士が、あなたのパケットを届けるために、日々協力しあって運用しています。そして、これは世界中のどこよりも日本の技術コミュニティにおいて強く見られるものです。」とRandy氏。

一方、技術以外のレイヤーが関わると、オープンな対話がされないことへの問題提起も行われた。幅広い層でのオープンな対話が充分にされない結果、ユーザーにとって望ましくない運用につなげることになってはいけない、または日本が外から「クレイジーなことをやっている」と思われない状況にしたいとの想いが、具体例を挙げながら伝えられた。また、インターネットは「大切に育むもの」であり、「規制する」ものではなく、言葉は思考を規定するとのことから「インターネットガバナンス=インターネットの統治」という言葉の使い方にも警告を鳴らす。

そして最後に、「日本のコミュニティのすべてのレベルの人を取り込んだオープンな対話を、みなさんでどう作り上げて維持していくか。それがガイジンの私からみなさんへの質問です」として締めくくった。

（JPNIC インターネット推進部 木村泰司、IP事業部 奥谷泉）